

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の誕生

戸 田 徹 子

山梨県立女子短期大学 国際教養科

The Beginnings of the Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia

Tetsuko TODA

Department of International Studies, Yamanashi Women's Junior College

Abstract

The Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia was founded in 1882 and started its Japan mission in 1885. This paper examines the context in which this organization was established.

Keywords: Friends (フレンド), Quakers (クエーカー), Philadelphia Yearly Meeting (フィラデルフィア年会), Japan mission (日本伝道), women in missionary work (女性の伝道活動)

はじめに

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は1882年に結成され、1885年には日本伝道に着手した。この伝道協会は日本と縁が深いばかりでなく、アメリカのクエーカー界にあっても特異な存在だった。本論ではフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の史料に、同機関の成立事情を追う。

フレンドと外国伝道

19世紀初頭からイギリスとアメリカでは外国伝道への関心が高まっていたが、フレンド（クエーカー）は独自の信仰的立場から外国伝道には否定的な態度をとっていた。ある特定の信仰に人を導くことは、クエーカーリズム（クエーカー信仰の意）の「内なる光」や「聖霊の導き」の教えに反する。宣教師は伝道を職業とする者であり、信仰に関わる「給料生活者」に他ならず、これもクエーカーリズムの「平信徒の理想（lay ideal）」と相容れなかった。クエーカーにとって伝道とは、「関心（concern）」をもったクエーカーが所属月会の許可を得て、各地のミーティング（クエーカー

の教会）に同胞クエーカーを訪ねるという巡回伝道をおもに意味した。巡回伝道はあくまで教派内の伝道活動で、これによってお互いに信仰を深め合い、あわせてミーティングを越えた交流をはかるのが目的だった。クエーカー以外の人たちに働きかけるとすれば、自らミーティングに来た人たちやクエーカーの居住地に住む人たちを対象にするにすぎなかった。¹⁾

フレンドの外国伝道支援活動はイギリスで始まった。ロンドン年会は人為的活動（creaturely activity）を忌み嫌っていた。それゆえ宣教師の長期滞在と本国からの財政支援を前提とする大規模で組織的な外国伝道を、公に支持することはなかった。しかし19世紀前半、イギリスのフレンドの間に外国伝道に関心をもつ者が現われ始めた。ダニエル・ウィラーやジェームズ・バックハウスといったイギリスのクエーカーたちは個人の立場で、他教派の伝道地を訪れた。彼らはいずれも宣教師と現地のキリスト者をなぐさめ、励ます目的で旅したのであり、なにかしら恒常的で組織的な活動を始めようとしたわけではなかった。とはいえ彼らの異教地での見聞は、宣教師の熱意や伝道成果をイギリスのクエーカーに伝えるところとなり、外国伝道への関心を育んだ。さらに奴隷解放運動とリベリア共和国の建国（1847）や、阿片戦

争(1840-42)、セポイの反乱(1857)とその後のインド直接統治開始などを契機に、イギリスのクエーカーの間に異教地への関心が醸成されていた。転機が訪れたのは、19世紀も半ばを過ぎてからのことだった。86才だったジョージ・リチャードソンは1859年12月12日付けの手紙、「伝道に関する書簡」を公表し、クエーカーも組織をつくり、外国伝道に着手すべきことを訴えた。若い頃、彼はウィリアム・ケアリーのインド伝道に関心を寄せていたのだが、老年に達してから読んだアドニラム・ジャッドソンのビルマ伝道の本に刺激され外国伝道を提唱するに至ったのだった。この問題を有力フレンドたちが取り上げるところとなり、1860年にはアクワースで会議がもたれた。年会も1860年から翌年にわたり時間をかけて外国伝道問題を検討し、その結果、ロンドン年会は組織的な伝道活動を承認した。これにより、フレンドたちは伝道地からの情報にさらに親しむようになり、他教派のシリア、アフリカ、インドでの伝道活動を個人的に支援する者も現われた。有志らによって1865年に、外国伝道のための暫定的な委員会が設けられ、宣教師派遣に乗り出したが、この委員会による派遣宣教師のなかにはアメリカ人フレンドも含まれていた。1870年にはフレンド外国伝道協会(the Friends Foreign Missionary Association)が結成され、フレンドも本格的に外国伝道に取り組み始め、パレスチナ、インド、セイロン、マダガスカル、中国四川省、東アフリカのペンバにフレンド宣教師を送った。²⁾

アメリカでも外国伝道への関心は海外の伝道地を訪問した個人の働きによって喚起された。ニューイングランドの2人のフレンド、イーライ・ジョーンズ夫妻は数回にわたって海外の伝道地を巡回訪問した。彼らは帰国すると、アメリカ各地のフレンド集会で現地報告をし、伝道支援を呼び掛けた。1857年にリベリア共和国を訪ねて外国伝道の必要性を確信した夫妻は、1867年にシリアとパレスチナを訪問した。彼らはエルサレム近郊のラマラを訪ねたとき、女子教育に従事したいという若い女性の申し出を受け入れ、そこに女子学校を興すのを助けた。そしてこの女子学校への支援をイギリスのフレンドに委ねた。さらにシリア訪問中、彼らはセオフィラス・ワルドミュアに出会った。彼はプロテスタントのスイス人で既に10年間にわたりアビシニアで伝道活動に従事し

ていたが、クエーカーの教えに共鳴しフレンドとなり、ベイルート近くのブルマナで伝道活動を展開し、伝道学校と病院を運営し始めていた。この仕事の後援を、ジョーンズ夫妻はニューイングランドのフレンドに頼んだ。イーライは1876年と1882年にもパレスチナを訪ね、ブルマナに教会と男子学校を、ラマラに女子訓練ホーム(girls' training-home)をつくるのを助けた。さらに新しい動きがインディアナ年会でみられた。インディアナ年会ではルイス・ストリート夫妻が外国伝道を志したが、年会の支持を得られず、イギリスの外国伝道暫定委員会の派遣により、マダガスカルに赴いた。さらに、同年会のエルカナ・ピアード夫妻も同様な形でインド伝道に派遣された。しかし1870年にはインディアナ年会のフレンドの間に外国伝道協会が結成され、サミュエル・A・パーディーをフレンド宣教師としてメキシコに送り、教会、学校、文書活動にあたらせた。アメリカのフレンドは独自の伝道地を拓き始めたのであった。³⁾

このようにアメリカでも徐々に外国伝道への関心が高まり、個人レベルで、組織レベルで各ミッションに財政援助がなされていた。しかしこれらの動きは散発的だった。アメリカで各年会に外国伝道協会が結成されていくのは、1880年代に入ってからのことだった。さらにアメリカでは、すべての年会が外国伝道活動を支持したわけではなく、これを支援したのは一部のフレンドに限定されていた。また注目すべきことに、南北戦争後に盛んになった婦人外国伝道運動の影響から、アメリカではフレンドの外国伝道協会はほとんどが当初女性組織として結成された。

19世紀後半のクエーカーリズム

イギリスのフレンドはロンドン年会という一つの年会の下に結束していた。これに対し、アメリカでは19世紀前半に「ヒックス派の分離」、「ウィルバー派の分離」と2度にわたり大きな分派が起き、フレンドは「正統派」「ヒックス派」「ウィルバー派」に別れた。そしてアメリカにおいて外国伝道は福音主義的傾向の強い一部のフレンドによって担われたものだった。

18世紀半ばから19世紀にかけてフレンドは静寂主義の時代を迎えていた。クエーカーの静寂主

義とは、人間の意思や感情、理性、知性は「内なる光」の経験を汚すものであり、信仰面でも生活面でも極力人間の関与を排除しようとする考えだった。その結果、教会や家庭で信仰心を高める指導はなされず、イギリスでもアメリカでも友会は形式主義に陥ってしまった。聖書は聖霊の導きを損なうと考えられていたので、教会で用いられることはなかった。また人為的活動を恐れるあまり、定期的に家庭で祈りのときを持つことや、聖書講読会が開催されることもなかった。そればかりでなく聖書を置いていない家庭も多く、若者たちには聖書の知識が欠けていた。一方、生活面では何もしない立場に基づき変化を嫌った。

これに加えて、フレンドはアメリカ社会において少数派になりつつあった。1783年の時点でアメリカで大きい教派は長老派、会衆派、聖公会、そしてクエーカーだった。しかし19世紀前半にメソジスト派とバプチスト派が大躍進を遂げた。一方で旧来の教派は衰退し、そのなかで唯一長老派だけが第2次信仰復興の手法を取り入れることで辛うじて会員数を増加させていた。他教派に押されていたばかりでなく、東部の友会では西部移住で会員数が減った。1757年のペンシルベニア植民地議会におけるクエーカー議員の辞職以来、クエーカーは政治活動を放棄していた。さらに産業化の進むアメリカ社会で商業、製造業で成功したクエーカーも多かったが、その相対的な勢力は低下していた。弱小教派となったフレンドは内部結束を計ることで生き延びようとした。生活規律が強化され、除籍される者も増えた。ミニスターとエルダーは権威主義的で、会員は生活規則に縛られていた。「内なる光」の教えだけでは信仰心の維持は困難で、生活規則遵守だけが求められ、友会は行き詰まり状態に陥っていたのである。

イギリスではメソジズム運動が静寂主義を打破するきっかけとなった。メソジズム運動は、18世紀半ばにジョン・ウェスレーによって始められた。イギリスのフレンドはメソジストの指導者たちと交流を深め、次第に彼らの福音主義——救いの過程における自由意志とキリスト者としての社会的責任の強調——を受容し、積極的に聖書普及活動や改革運動に参加していくようになった。アメリカでは19世紀初めの第2次信仰復興を契機に、フレンドのなかにも福音主義を受け入れた者が現われ始めた。彼らの多くは都市部の指導的な

フレンドで、以前からイギリス人フレンドとの交流の機会に恵まれていた人たちであった。これに対し、あくまで「内なる光」の教えを重視する人たちもいた。彼らは地方のフレンドが多く、これまで都市部のフレンドが年会や救難委員会（年会の執行委員会）を牛耳っているのを快く思っていなかった。後者の立場を代表するのがニューヨーク年会のエライアス・ヒックスで、彼は内なるキリストと聖霊の導きを信じ、歴史的キリストと聖書を重んじなかった。年会指導者たちが彼の発言を封じようとしたことから、この対立は信仰の自由、言論の自由の問題を含む対立にエスカレートしていった。ヒックス派は1827年に分離した。この「ヒックス派の分離」は信仰と教会政治の2面の対立から生じた。クエーカーの「内なる光」の教えを強調し、教義を否定する立場をとり、必ずしもクエーカーの伝統に固執せず、寛容で信仰の自由を標榜し、民主的な教会政治を求めるヒックス派と、聖書を重視するより福音主義的な正統派との対立であり、都市部のフレンドへの権力集中に対する不満の現われでもあった。この対立によって、アメリカ各地の年会は2派に分離し、福音主義を受け入れたフレンドは「正統派」を名乗った。⁴⁾

第2番目の分派は1840年代に正統派年会内で起きた「ウィルバー派の分離」である。イギリスのフレンド、ジョセフ・ジョン・ガーニーは1837年に渡米し、贖罪のキリスト、聖書研究、教育を強調する福音主義的傾向の強い教えを、各地の正統派年会に広めた。これに反対したのが、ニューイングランド年会のジョン・ウィルバーだった。彼はガーニーが信仰告白を求め、聖書を唯一絶対の神の言葉として説いていると批判した。ウィルバーはフレンドの伝統を強調した。ウィルバーの支持者は少数派で、ウィルバー派または保守派と呼ばれた。ウィルバー派が分離後の正統派は実質的にはガーニー支持者の集まりだった。これらの分派の結果、19世紀後半のアメリカには3種類の年会が存在していた。すなわち「ヒックス派」「正統派」「ウィルバー派」の年会である。「ヒックス派」は民主的で、自由主義的な立場をとり、「内なる光」の教えを強調し、沈黙の礼拝を遵守していた。「ウィルバー派」は「ヒックス派」と同様に神を待ち望む沈黙の礼拝を守る一方で、伝統的なフレンドの服装や言葉遣い維持して

いた。福音主義的傾向の強い「正統派」は後にパストラル形式の礼拝を導入するようになっていった。⁵⁾

パストラル形式を採用し始めたのは中西部の正統派年会であった。南北戦争後、中西部ではリバイバル運動が席卷していた。そもそも中西部に移住したフレンドは近くに友会の教会がない場合が多かったのだが、一方で他教派の者たちとともにリバイバル・ミーティングに参加する機会を得た。彼らはこのような機会を通してプロテスタント諸派に一般的なパストラル形式の礼拝——牧師がいて、讃美歌がうたわれ、式次第に沿って礼拝が行なわれる——に親しむようになった。また逆に、他教派のプロテスタントがフレンドの礼拝に参加したり、フレンドが自分たちの教会でリバイバル・ミーティングを催すこともあった。その結果、友会は多くの入会者を得たが、新しくフレンドになった者たちはクエーカー本来の式次第のない沈黙の礼拝には慣れておらず、彼らのためになにか工夫を加える必要が生じた。中西部の教会は巡回伝道者に滞在してもらったり、パートタイムで牧師を雇ったりし始め、ついには常勤牧師を採用するに至った。そして彼らは友会に独自の沈黙の礼拝を放棄し、逆に自分たちの教会にパストラル形式を持ち込んだのである。パストラル形式は東部にも伝わり、正統派フィラデルフィア年会を除く、すべての正統派年会がパストラル形式を採用するようになった。⁶⁾

アメリカにおいて、フレンド外国伝道支持層の拡大はパストラル形式の礼拝の導入と密接に関係していた。パストラル形式は有給牧師を必要とするがゆえ、同じく有給である宣教師の派遣を前提とする外国伝道事業への道を拓くことになったのである。正統派が外国伝道に乗り出したのに対し、沈黙の礼拝を遵守するヒックス派とウィルバー派は外国伝道にまったく関心を示さなかった。彼らにとって計画的になされる伝道活動は人為的で、クエーカーリズムの「内なる光」や「聖霊の導き」の教えに反し、外国伝道事業はむしろ忌み嫌われるべきものと考えられていたのである。

正統派年会のなかで、フィラデルフィア年会は特殊だった。「ヒックス派の分離」が起きたとき、フィラデルフィア年会では約16,000名の会員が年会を去り、ヒックス派フィラデルフィア年会を結成した。正統派フィラデルフィア年会に残った

会員数は約8,000名にすぎなかった。⁷⁾ 次に「ウィルバー派の分離」が勃発したとき、他の正統派年会とは異なり、正統派フィラデルフィア年会ではウィルバー派が多数派を占め、ガーニーを支持したのは少数であった。本来であればウィルバー派に所属すべきところであったが、年会の上層部は再び年会が分裂し会員が減ることを恐れ、正統派とウィルバー派のいずれの年会とも書簡交換をしないことを決めた。(友会では年に一度、各年会が相互に書簡交換する。他年会からの書簡を公式に受け取り、それを年会で読み上げ、返事を送ることはその年会の正当性を認めることを意味した。) これは正統派フィラデルフィア年会がガーニー派とウィルバー派の共存の道を選択したこと、そして正統派年会ともウィルバー派年会とも組しない、孤立を選んだことを意味した。正統派を名乗りながらも、正統派フィラデルフィア年会の多数派は保守的なウィルバー派で、パストラル形式を採用することはなかった。⁸⁾

正統派フィラデルフィア年会のガーニー派は少数派ながら強力で、都市部に集中していた。彼らはフィラデルフィア市の12番街月会とハバフォード大学、『フレンド・レビュー』紙を牙城とした。ガーニーは神への全面的依存に代えて、救いにおける個人の役割を重視し、聖書研究と改革運動を支持していた。ガーニー派フレンドは社会で積極的役割を果たしたい人たちであった。彼らは年会とは別個に組織を結成して、インディアンや解放奴隷への援助、日曜学校、平和、禁酒など様々な社会的活動に関与したが、外国伝道もその一つだった。⁹⁾

クエーカー女性の活動

アメリカ史において、クエーカー女性たちは奴隷解放運動や女権運動などの社会的活動で指導的役割を果たしたことで知られている。伝記辞典、『著名なアメリカ女性たち、1607－1950』によれば、女性奴隷制廃止論者の40パーセントはクエーカーだった。さらに1830年以前の出生女性のうち、クエーカーはフェミニストの19パーセント、婦人参政権者の15パーセントを占めていた。1800年の時点で、全アメリカ人口にクエーカーの占める割合は多く見積もっても2パーセントだったことを考えれば、これらの活動におけるクエ

ーカー女性の指導性は人口に比して群を抜いていたといえる。¹⁰⁾ なかでも最も有名なクエーカー女性はルクレシア・モットだった。彼女は奴隷制廃止運動で活躍するなかで、女性の権利意識に目覚め、後にニューヨーク州セネカフォールズで女性の権利の大会を主催した。女権運動においてモットと行動をともにしたスーザン・B・アンソニーや、そして時代は下るが1910年代に婦人参政権運動を率い、攻撃的な活動で知られたアリス・ポールもまたクエーカーであった。しかしこれらのクエーカー女性たちの活躍は個人的なものであり、クエーカーの教会組織がこれらの活動に関与することはなかった。

クエーカーリズムにおける男女平等はあくまで信仰の分野に限定されていた。神の前で男女は平等であるがゆえ、女性は礼拝会で感話を述べることができたし、ミニスターにもなれた。さらに月会の許可さえあれば、夫や子供を家に残し巡回伝道でかけることすら可能だった。しかし、礼拝会は男女一緒であったが、年会、四季会、月会のいずれのレベルにおいても、事務会は男性集会と女性集会に別れていた。かつ女性集会の権限は弱く、男性集会に従属していた。クエーカーの教会組織の基本単位である月会の場合、女性月会は会員の除籍、結婚の認可、教会規則違反の判定を下すにあたって、男性月会の承認を必要とした。また女性月会の企画は男性月会の承認と財政措置を求めなければならなかった。つまりクエーカーにあって、信仰以外のところでは女性に従属的な立場に置かれていたといえる。¹¹⁾

同じクエーカーであっても、各年会によって女性への対応は異なっていた。前述のルクレシア・モットとアリス・ポールはどちらもヒックス派フィラデルフィア年会に所属するクエーカーだったが、ヒックス派フィラデルフィア年会と正統派フィラデルフィア年会とでは女性の地位に著しい差があった。正統派フィラデルフィア年会においては女性たちの活動は制限されており、また女性集会の役割も小さかった。このような相違が生じた理由として、マーガレット・H・ベーコンは、3つの要因を指摘している。まず第一に、ヒックス派が地方で広範な勢力をもっていたのに対し、正統派は都市を基盤とし、より富裕で、それだけに外部社会の慣習に順応する傾向が強かったことがあげられる。正統派は、19世紀の上流階級や中

産階級の間で一般的だった女性観を受容し、女性の社会的活動を嫌っていたのである。第2の要因は、ヒックス派が礼拝会における信仰と言論の自由を主張して分離したことから分かるように、より寛容で民主的な人々であったことだった。そして第3の要因は、ヒックス派が有能で強い女性たちに恵まれていたことである。これらに加え、正統派フィラデルフィア年会が他年会との書簡交換をやめたことでも、女性の役割が縮小した可能性が指摘される。前述の通り、19世紀半ばに「ウィルバー派の分離」が生じた時、正統派フィラデルフィア年会は自分たちの年会が分裂するのを避けるために、他年会との書簡交換を中止した。女性たちにとって、これは他女性年会との書簡交換の中止を意味し、彼女たちは他年会の女性たちとのコミュニケーション手段を失った。会計管理や議事録作成と並んで、他女性年会との書簡交換は女性年会の重要な任務の一つだった。他年会からの書簡を読み上げ、返答の可否を決定し、返事を起案する。そして、これを読み上げ承認を得た上で、清書、送付するという一連の作業は、女性たちにとって、それなりに重みのある仕事であった。正統派フィラデルフィア年会の女性たちは重要任務の一つ失ったことで、自分たちの年会内でも結束力を弱め、影響力を減じていった。¹²⁾ 女性集会の男性集会への依存は20世紀に入っても続き、女性たちは月会および年会の各種常任委員会や、クエーカーたちが教会活動とは別個に運営する様々な慈善事業の委員会からも締め出されていた。しかし1910年の教会規則改正で、女性月会に自治権が与えられ、同時に男性月会と女性月会の合同会議の開催も認可された。そして1914年には、執行委員会である代表者ミーティング(the Representative Meeting)をはじめとする年会の各種常任委員会に女性が参加する権利が認められた。これにより正統派フィラデルフィア年会における男性中心の原則は撤廃された。しかしながら男性年会と女性年会が様々な過渡的な改正を経て合併し、性差の壁を越えた一つの年会を形成したのは1930年になってからのことだった。¹³⁾

このように正統派フィラデルフィア年会では1910年代以降、女性の活動の場が急速に拡大していったが、19世紀後半には正統派フィラデルフィア年会の女性たちは未だ従属的な状態にあった。そればかりでなく、この時期、彼女たちの活

動は停滞期を迎えていた。とりわけ1857年から1887年頃にかけて、女性年会は活力を失い、同時代の社会問題に無関心であった。アメリカ国内で奴隷問題が紛糾するなか、これとは逆に年会議事録では奴隷制への言及は減った。インディアン問題が取り上げられたとしても、それはあくまでチュネサッサ (Tunesassa) の学校のことが中心だった。戦争が勃発しても、平和の主張も反戦の声も聞かれず、1846年のメキシコ戦争のことは議事録にまったく載っていないし、南北戦争についても1862年と64年の救難委員会報告に簡単な記載があるだけだった。だがこの時代に、正統派フィラデルフィア年会の女性たちは敢えて2つの活動に着手している。南北戦争が始まると、女性たちは北軍支配地の黒人のために衣類などの必需品を供給し始めた。そしてこの女性たちの非公式な活動は、1863年に正統派フィラデルフィア年会の男性たちが「フレンド解放奴隷協会」(the Friends Freedmen Association) を組織し本格的な救援活動を開始するまで続いた。第2番目の活動は、本論で取り上げている外国伝道であった。¹⁴⁾

アメリカ合衆国では南北戦争以降、婦人外国伝道運動が盛んになっていった。婦人外国伝道運動とは女性による女性のための外国伝道を支援する活動であり、具体的には海外に女性宣教師を派遣し、女性対象の伝道活動を財政的に支援することだった。婦人外国伝道の支持者は外国伝道の鍵は女性にあり、「キリスト者の母親」、「クリスチャン・ホーム」を生み出すことによって、子供や配偶者に感化を及ぼし、異教社会へのキリスト教伝道は達成されると考えていたのである。これを目的とする婦人外国伝道協会の設立は、アメリカでは1861年の超教派組織であるアメリカ婦人合同伝道協会 (Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands) が最初だった。主だったプロテスタント教派にはすでに外国伝道協会が結成されていた。しかし、1868年から1870年代にかけて、男性幹部の指導下にある既存の外国伝道協会とは別個に、あるいはそれを補完する機関として、会衆派、メソジスト派、長老派、バプチスト派、聖公会などの各教派に女性が運営する婦人外国伝道協会が次々と設立された。アメリカにおいて婦人外国伝道協会は1890年までに34団体を数え、あわせて926人の宣教師を派遣していた。さらに1899年には42団体に増え、1200人以上の

宣教師を支援し、その資金は優に百万ドルを越していたといわれる。これらの数字は、先輩格にあたるイギリスの婦人外国伝道協会を凌駕する働きを示すものだった。¹⁵⁾

クエーカー女性たちのなかでこの運動に最初に反応したのは、中西部の正統派であった。ウエスタン年会のエライザ・C・アームストロングはインディアナ州モンロビア在住の両親を訪ねたとき、メソジスト派の婦人外国伝道協会に加わっているフレンドがいること知り、友会に婦人外国伝道協会を組織することを決意した。友会の女性たちが定期的に会合を開き、「特に女性的な方法で世界の女性たちにキリストの教えを伝える」べく活動することをアームストロングは願った。さっそくウエスタン年会の四季会の女性代表者たちに手紙を書いたが、彼女の呼びかけへの反応は早く、6ヵ月のうちに8つの伝道協会が結成された。そして1881年9月にはインディアナ州プレーンフィールドで開催されたウエスタン年会(女性)においてウエスタン年会婦人外国伝道協会が結成されたのだった。これに続き、1882年12月には正統派フィラデルフィア年会の一部の女性たちがフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会を組織した。1883年にはアイオワ年会とインディアナ年会に、1884年にはニューイングランド年会とオハイオ年会に、1885年にはノースカロライナ年会とカンザス年会に、そして1888年にはニューヨーク年会に、それぞれ婦人外国伝道協会が結成されていった。フレンド婦人外国伝道協会の機関誌として、1885年には *The Friends Missionary Advocate* 誌が創刊された。この機関誌は当初こそ他教派の伝道の様子を報じていたが、後に各地のフレンド伝道地——メキシコ、ジャマイカ、シリア、マダガスカル、インド、中国、日本、そしてアラスカ——から便りが寄せられるようになった。学校や病院を求める声と共に、食物や衣服、結婚や葬儀などの慣習、そして現地の人たちの話が紹介され、これらの記事を通して「目にみえぬ姉妹」への関心が高められていった。そして1887年9月に正統派年会の連合体として「五年会」が組織されると、エライザ・C・アームストロングが会長を務めるウエスタン年会が呼び掛け人となって、1888年3月に各地のフレンド婦人外国伝道協会(10団体)の合同会議がインディアナ州インディアナポリスで開かれ、その結果、

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会を除く、すべてのフレンド婦人外国伝道協会が連合して、フレンド婦人合同外国伝道協会（the Women's Foreign Missionary Union of Friends in America）が結成された。¹⁶⁾

他教派の婦人外国伝道協会が既存の外国伝道協会の働きを補強する目的で、すなわち婦人伝道部門を特化させ、それを援助する目的で組織されていたのに対し、フレンドの場合は女性たちが最初に外国伝道に着手した。しかも組織的伝道活動はフレンドには馴染みの薄い分野だっただけに、批判される可能性が残されていた。

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の結成

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は1882年12月12日にフィラデルフィア市のメアリ・A・ロングストレス宅で開かれた会合において結成された。この会には22名のフレンド女性が参加し、その場で役員選出が行なわれた。伝道協会『年報』第1号掲載の伝道協会憲法は第2条に、その目的とするところを次のように述べている。

The object of this Association shall be to promote the knowledge of the gospel among women and children in heathen lands, and to assist in their Christian education, as ability and qualification are given by the Lord.

伝道協会の目的は異教地の女性と子供に、聖書の教えを広め、教育を与えることだった。また憲法第3条は会員になれる者を「フレンド女性で年会費1ドルないしはそれ以上を支払う者」と定め、会員は女性に限定されていた。¹⁷⁾ フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は外国伝道の分野において「女性による女性のための活動」(women's work for women)を推進するために、すなわち女性たちが女性を対象とした婦人伝道を遂行するために創設された組織であった。

最初の会合の様子はスナップ写真のように鮮明に脳裏に焼き付いていると、出席者の一人で会計担当になったレベッカ・N・テラーは次のように回顧している。当時、フィルバート通り13番

街からジュニパー街までのブロックは広大で風格のある屋敷が並ぶ通りだった。どの家でも、大きな窓、緑色のブラインド、そして茶色の石や白い大理石の外階段は、塵ひとつなく、きちんと整えられていた。高い天井の広い居間には厚い絨毯が敷かれ、窓にはモスリンの白いカーテンが掛けられている。そのような家々のなかでも一番整然としていたのがロングストレス邸だった。そこに有徳の女性たちが集まり神聖な雰囲気満たされた小さな会をもった。レベッカと彼女の友人ルーシー・B・ロバーツ（旧姓ロングストレス）はまだ若く、他の出席者たちとかなり年が離れていた。自分たちにいったい何ができるのだろうかと2人は不安を感じ、すっかり気後れしていた。こんな2人をサラ・W・ニコルソンは、参加してもらって嬉しいと言って励ましたという。役員選出で会計を決める番になったとき、メアリ・モリスがレベッカの方に向かって頭を下げ、レベッカは会計担当に選出された。彼女はそれまで会計簿をつけたことがなかったが、夫の助言を得ながら、副会計担当者に任命されたルーシーと7年間にわたり財務の苦勞をともにしていくことになった。ここに登場するサラ・W・ニコルソンは伝道協会の初代会長となった女性であった。また1882年12月12日の会合は4人の女性が連名で招待葉書をだして開催されたものだったが、レベッカによれば、メアリ・モリスこそがこの会を召集した中心人物に他ならなかった。メアリはヨーロッパとアフリカを旅した際、これらの地にクエーカー宣教師がいなかったことを残念に思い、外国伝道協会設立に乗り出したのだという。メアリの夫、ウィスター・モリスはペンシルベニア鉄道の社長で、フレンドの有力者だった。¹⁸⁾ ロングストレス邸の描写にせよ、メアリ・モリスへの言及にせよ、レベッカ・テラーの記述からは、フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会が富裕なフレンドの指導の下に結成された経緯が読み取れる。

最初の会合において、伝道協会への参加を広く呼び掛けるため案内状を印刷することが決まり、この文書は1883年1月16日付けで出版された。案内状は異教の女性たちが虐げられた状況に置かれていること、そして異教地では女性に近づけるのは同性の女性だけであることを指摘し、女性による女性を対象とした外国伝道、すなわち婦人外国伝道の必要性を次のように訴えていた。

Our hearts were stirred by the reflecting upon the oppressed and depraved condition of our sisters among the heathen, and as the rules and customs of social and religious life in some of these countries, do not permit their women to be approached by any but women, it was felt that the time had come for us to do what we can, to convey to them the glad tidings of salvation through Jesus Christ.

さらにフレンド伝道に有利な点として、クエーカーリズムは霊性を重んじ、男性の介在を必要とする洗礼を求めないことから、異教の女性たちに受け入れやすい素地があると続ける。

The non-requirement of water baptism, may in some instances prove a blessing, as the administration of that ordinance requires the intervention of a man — in submitting to which, these down-trodden women are separated by a ban of ostracism from husband and children and all family ties.

そして「私たちと同性の者たち、偏狭と迷信の支配下で無知な状態に置かれている女性たち」に救いの手を差し伸べるべく、友会にも婦人外国伝道協会が結成されたことを告げ、最後に会費と次の会合予定（1883年2月13日）を伝えた。この第2回目の会合には約40名が参加した。¹⁹⁾

案内状は婦人伝道の必要性和クエーカーリズムの特異性にごく簡単に言及するに留まっていた。はたしてフレンド女性たちが外国伝道活動に着手した積極的根拠はなんだったのか。伝道協会は1884年3月に『なぜフレンドは外国伝道に従事すべきなのか』と題するリーフレットを出版し、どうしてフレンドが、なぜフレンド伝道なのかという疑問に答えようとした。²⁰⁾ この文書は伝道協会の結成理由をより包括的に、より詳細に語っているという点で注目に値する。伝道協会は以下の4つの理由をあげる。

最初と第2番目の理由は、それぞれクエーカーの歴史と教えに由来する。初期のフレンドは異教徒伝道に熱心な人々だった。彼らはクエーカーの教えを海外にも伝えようと、ヨーロッパのみならず、アジア、アフリカ、そして大西洋を越えてアメリカや西インド諸島にまで足を延ばした。クエーカーリズムの創始者ジョージ・フォックス自身も

新大陸に渡りインディアンや西インド諸島の黒人の間で布教活動をし、「真のキリスト者」は「すべての黒人とインディアンに布教するべきだ」とアメリカのフレンドに書いた。伝道協会によれば、外国伝道はフレンドにとって新奇で異質な活動ではなかった。むしろフォックスや初期のフレンドたちの伝道精神がいま蘇ろうとしているのである。この意味で、婦人伝道協会の活動はクエーカーの伝統の上に位置付けられると主張している。クエーカーリズムには儀式がなく、平和主義を堅持している。それゆえ異教地の人たちに親しまれやすいというのが、第2点目だった。キリスト教会に入会すると、信者はキリスト教儀式の尊守を要求され、その結果、現地の社会習慣と軋轢が生じ、信者が家から追放されることがよくある。しかしフレンドには聖礼典がなく、その心配はない。そもそも「真のクエーカーリズム」は内なるもの、霊的なものを重視するがゆえ、柔軟で、適応性に富んでいるのである。さらに平和主義について言えば、個人の自由や世俗の財産を失ってまでも平和主義を貫こうとする人たちの説く信仰が伝道地の人々の心に響かないわけではないというのであった。²¹⁾

これら2つの理由——クエーカーリズムの創始者ジョージ・フォックスの言動に外国伝道の根拠を求め、外国伝道におけるクエーカーリズムの有利さを説く——が教派的見地からの意義付けだったとすれば、次にあげられる第3、第4の理由付けは婦人外国伝道運動に触発された結果だったといえる。第3番目の理由というのは、外国伝道活動がアメリカの教会に良い影響を与えてくれることだった。フレンド外国伝道開始は他教派と比べ約半世紀ほど遅れた。主要な教派はすでに異教地で活動を進めており、実績もあがっていた。それなのになぜフレンドがそこに参入しなければならないのか。その必要性はどこにあるのか。この問いに対し、伝道協会は、外国伝道にはまだまだ活動の余地が残されており、クエーカー信仰にも布教の機会が開かれているばかりでなく、外国伝道活動に携わることによってもたらされる恩恵をみすみす逃してはならないと述べる。

Not only is there vast room for more labor, and some opening for the entrance of their special views, but the Church at home cannot afford to miss the

blessing that comes from such service. Obedience to the call of the Lord always brings a present reward, and nowhere are the words of holy writ, "He that watereth, shall be watered also himself," more truly verified than in the effort to fulfil the command of Christ, "Go ye into all the world, and preach the gospel to every creature." Slumbering churches have been awakened by it, and under the power of the Holy Spirit accompanying such service, have been blessed with new life. ²²⁾

神の呼びかけに従う者には必ずこの世で果報がもたらされるものであるが、聖書にある "He that watereth, shall be watered also himself" の教えは、「全世界に行って、すべての被造物に福音を宣べ伝えよ」というキリストの言葉を実現しようとする者たちに一番あてはまる。具体的には、外国伝道を遂行することで母国アメリカの停滞気味の教会が活性化することが期待できる。クエーカーの教会においても、これは然りで、伝道協会の指導者たちは外国伝道への参入によって自分たちの信仰生活も高められると考えたのであった。これはいわゆるリフレックス理論で、この理由付けは婦人外国伝道運動において頻繁に言及されるところのものであった。²³⁾

最後に、伝道協会はクエーカーには女性の地位向上に尽くすべき特段の理由があること指摘する。単純に人道的見地からだけでも婦人伝道を遂行しなければならないとして、まずリーフレットは虐げられた異教の女性とキリスト教国の女性を対比的に描きだす。

That women should engage in this work, even if actuated by no higher than humanitarian motives, must be apparent to all. The condition of oriental women is degraded. They are regarded as beings inferior to man, and in some places are respected little more than brute beasts. They are denied all education and personal liberty, and are literally groaning under the iron heel of man's despotism. For the amelioration of this bondage, every intelligent woman must ardently long, and those who have partaken of love of God in Christ, and realized the elevation of woman to be the result of Christian teaching, cannot resist making some effort for the benefit of their down trodden sisters. ²⁴⁾

異教地では女性は男性に劣るものと考えられ、なかには「獐猛な獣」並みの扱いのところもある。女性たちは教育の機会や個人の自由を奪われ、「文字通り男性の専制の鉄の踵の下で呻吟している」。これに対し、キリスト教国の女性は知的で、キリスト教のおかげで地位が高い。このような恩恵に浴している女性たちには異教地の「虐げられた姉妹たち」を助ける義務があると続ける。

リーフレットは女性の隔離状態にも言及する。女性は外部社会と遮断された世界に生きている。この女性だけの世界に入りこめるのは女性だけであるがゆえ、女性を助けるためには女性宣教師の派遣が必要となる。女性隔離の例として、リーフレットはインドの上流階級の例をあげる。インドでは上流階級の女性は家族以外の男性と話すことが禁止されている。男性医師は女性患者を直に診察できない。医師は女性を包んでいるシーツに開けられた穴を通して脈をとるのであり、舌を診るときも同様にする。女性患者は医師の質問に直接答えることもできない。²⁵⁾ このインド女性の姿はいささか戯画的であるが、女性の隔離状態は「女性による女性のための活動」を正当化する根拠だったばかりでなく、異教の不健全さをしめす指標たりえた。婦人伝道の必要性をアピールするために、婦人外国伝道運動では異教の不道德さとその犠牲になっている女性の姿が強調された。その媒体となったのは各派婦人伝道協会の機関誌で、これらの機関誌は一夫多妻制、妻妾部屋や売春宿の存在、未亡人の殉死などを喧伝していた。フレンド女性もこのような情報に触れ、なかばパターン化した異国の女性像を用いたのであった。

単純に人道的見地からだけでも婦人伝道を遂行しなければならないのだが、さらにフレンドには異教の女性たちを助けるべき特段の理由があると、リーフレットは続ける。

The women of the Society of Friends should feel an especial call to this work, for to the founders of that Society was it first given to accept literally the truth, that in Christ Jesus "there is neither male nor female," and to accord to their women a position of equality, on lines relating to service for the Lord. ²⁶⁾

友会の創始者たちは「神の前に男女の区別はない」という聖書の教えを文字通りに受けとめ、実際に

友会は女性に「礼拝において」平等の地位を与えた最初の教派となった。それだけに異国の女性を助ける特別の義務を負うと結ぶのであった。

このように『なぜフレンドは外国伝道に従事すべきなのか』と題するリーフレットにおいて、伝道協会は婦人外国伝道運動で多用されたリフレックス理論と虐げられた異教の女性像を復唱する一方で、クエーカーリズムの特殊性に基づき、婦人伝道への参加を促したのであった。すなわち、クエーカーはもともと異教徒伝道に積極的に取り組んだ教派であったこと、クエーカーの教えには異教社会で受け入れやすい素地があること、そしてフレンドは信仰において男女平等の立場を堅持してきたがゆえに、異教の女性たちにもその地位を保障すべく、婦人伝道に着手しなければならないと主張したのであった。その目的とレトリックにおいて、フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の結成は婦人外国伝道運動の一部だったと理解できる。外部社会の運動に触発されて始まった伝道協会であったが、クエーカーリズムの特殊性は十分に自覚していたといえるだろう。

1884年1月、伝道協会は第1回年次大会を開催した。年次報告書(第1号、1884年)は、初年度の会員数129名、年会費と寄付金等の収入合計額2,239ドル74セントを報告している。²⁷⁾

年会との対立

先に述べたように、正統派フィラデルフィア年会のなかで外国伝道を推進したのは少数派にすぎず、彼らが設立したフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は年会とは一切関わり合いのない任意団体だった。他方、ウィルバー派が多数を占め、一貫してノン・パストラルの立場を採ってきた正統派フィラデルフィア年会が、外国伝道を良しとするわけはなかった。年会と伝道協会の関係は必ずしも好ましいものではなく、伝道協会は年会の反対に抗しながら活動を進めていくことになる。

最初の2、3年間、伝道協会の仕事は、イギリスおよびアメリカ中西部のフレンドによるメキシコ、シリア、インドでの伝道を財政面で支援することに限られていた。しかし1884年から1885年にかけて、伝道協会の関心は次第に日本へと向けられていく。早くも1883年8月の伝道協会会合

において、フィラデルフィア在住でフレンドの礼拝会に出席しているキリスト者の日本人学生からの手紙が読み上げられた。彼の手紙は、フレンドの教えは日本の上流、中流階級に受け入れられる可能性が高いことを指摘する内容であった。1884年11月の会合において、伝道協会は日本派遣フレンド宣教師募集を決定し、以後、日本伝道開始にむけて着々と準備が進められていった。伝道協会が、後に日本を代表するキリスト者となる内村鑑三と新渡戸稲造の2人と接触を持ち始め、日本伝道についてアドバイスを求めたのは、この頃のことである。1885年1月に開催された伝道協会年次大会では、内村鑑三がアメリカ人教師(ウィリアム・S・クラーク)の影響下で回心した経験を語った。同年6月の会合には内村とともに、新渡戸稲造も出席した。(後に新渡戸稲造は友会に入会したばかりでなく、伝道協会の会合で知合ったメアリ・エルキントンと結婚することになる。)そして初代日本派遣フレンド宣教師、ジョセフ・コサンドが日本に向かって出発したのは、11月のことだった。²⁸⁾

日本への宣教師派遣決定は年会の態度を硬化させた。伝道協会の結成当初、年会は沈黙を守っていた。しかし1885年の年会においてフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の問題が取り上げられ、年会の執行委員会である救難委員会に検討が委ねられた。救難委員会は6月の定例会合で、慎重を期し小委員会を設けてこの件を審議することとした。その後、伝道協会が日本への宣教師派遣を決めたことが判明し、救難委員会は1885年9月18日付けで勧告文をまとめ、各月会に配布した。勧告文はまず宣教師派遣の問題を取り上げ、以下のように述べている。

We believe such action by an Association not recognized by the Discipline of our Yearly Meeting is a departure from the Gospel order heretofore recognized among us, which provides for the proper supervision of the religious concerns of individuals by our regularly established meetings for discipline, and that however benevolent may be the feelings of those engaged in such work, they ate [sic] entering upon a course which is disorganizing in its character, and the tendency of which is to remove those safeguards placed, as we believe, by Divine wisdom, for the

preservation of our members in a consistent support of those principles we were raised up to exhibit to the world.²⁹⁾

そのような行為はフィラデルフィア年会の規則に認められていない。そればかりでなく、個人の信仰上の「関心」は規則に関する委員会の監督を受けるというルールを無視している。いかに伝道協会が慈善的な気持ちから活動をしているにせよ、伝道協会は組織を混乱させる行為に及んでいるのであり、それはフレンドの主義を守り続けるために定められた取り決めに損なう傾向を導きかねない。

さらに伝道協会の一般的影響について、伝道協会が「いかに無垢な（悪気のない）気持ちから」結成されたにせよ、その活動は「礼拝の霊的性質」や「福音の真の源と権威」への理解を弱めることになるだろうと、伝道協会の活動全般を否定した。

We believe that the general effect of such an association however innocently it may have been entered upon, will tend to weaken our members in their appreciation of the spiritual nature of Divine worship, and of the true source and authority of Gospel ministry.

そして言葉を選びながらも、伝道協会に参加、支援しないようにと次のように結論した。

Therefore, while we wish to be tender of the feelings of all, we feel constrained to advise against continuing this movement, and we would affectionately caution our members against connecting themselves therewith or giving encouragement and support thereto.³⁰⁾

フィラデルフィア年会救難委員会は、外国伝道協会が年会のルールを無視して伝道活動に着手していることを指摘し、さらにその活動は霊性を重んじるクエーカーリズムとは本質的に相容れないと判断したのである。そして年会員に伝道協会と一切関係しないよう勧告したのである。

レベッカ・N・テラーはこの一件も鮮明に記憶していた。フィラデルフィア・フレンド婦人外

国伝道協会の指導者たちは熱意をもって活動していたが、なにぶんにも不慣れだった。年会の反対にあっただけに、彼女たちはクエーカーの規則に外れないように、クエーカーらしからぬと批判されないように、「言動のすべて、そしてお金の使途のすべてに細心の注意を払っていた」。ところがある日、「まさに正式な、とび色のクエーカー服」を着た二人の女性が伝道協会の会合に現われた。彼女たちはいつの間にか静かに玄関から入ってきて、ソファに腰掛けた。そして何も言わず会合の様子を見学し、会合が終わると即座に黙って立ち去った。彼女たちこそ救難委員会派遣の調査役だった。そしてこの訪問の結果が、救難委員会の出した勧告内容であった。³¹⁾

勧告文は露骨な伝道協会批判を避け、伝道協会の「慈善的な」意図に対しては一定の理解を示している。しかしながら、伝道活動によって本来のクエーカーリズムが脅かされるのを危惧したのだった。救難委員会ひいては年会の恐れは、19世紀後半におけるアメリカのクエーカー史の文脈において初めて理解しうる。先に述べたように、フィラデルフィア年会は正統派年会のなかで孤立した立場にあった。一方、正統派のなかではパストラル形式がさらに拡大しつつあった。すなわち正統派年会の大勢がフィラデルフィア年会が守っているクエーカーリズムから遠ざかりつつある現実を知っていたがゆえ、少しでもパストラル形式に近づく動きには敏感にならざるをえなかった。なぜなら外国伝道には宣教師という有給伝道者の存在が不可欠で、実際のところ外国伝道を推進しているのはパストラル形式を採るフレンドたちに他ならなかったからである。

なかでも有給伝道者の存在は、年会においてタブーだった。だからこそ勧告書は日本へのフレンド宣教師派遣計画について直に言及し、さらに6月に任命された小委員会が夏期をはさんでいるにもかかわらず、9月には結論を得て救難委員会に報告したのであろう。それまでは伝道協会に寄付をしていたのに、宣教師派遣には強硬に反対した人もいた。伝道協会の書簡ファイルに残されているレベッカ・ホワイトの手紙（1885年7月23日付け）は、宣教師派遣への強い反発を物語っている。伝道協会のリーフレット委員会委員長、メアリ・C・ホイットルは日本へのフレンド宣教師派遣に際しレベッカにも寄付を頼んだ。これに対し、

レベッカは有給で伝道にあたる宣教師の存在は許しがたいと、強い調子で次のように返答した。

I do not wish to aid in building up a spurious Quakerism in any part of the world: and as several of our well known principles are assailed, or in jeopardy, at the present time, particularly those that are opposed to a paid ministry; the so called ordinances; instead of waiting for and depending altogether upon the pointings and puttings forth of the Divine Head of the Church; I am rather distrustful of the present movement. Excuse my candor, but I would not wish to assist in hiring any one to preach the Gospel; and would like distinctly to understand that any thing I might give would not be appreciated in that way. The person ought to go entirely on his own concern, which thy letter seems to imply, and not for a living.

ホワイトは、「世界のいずれの場所でも、まがいもののクエーカーリズムを興すことを望みません」と断言する。彼女は伝統的なクエーカーリズムが危機に瀕していると考えていた。「神の教えと導きを待ち望み、それに全面的に依存する」というクエーカーリズムに代わって現われた、「有給牧師職、いわゆる宗教儀式、そして計画された礼拝会」を内容とする新しいパストラル形式のクエーカーリズム。しかしホワイトにとって、それは「まがいもののクエーカーリズム」に他ならなかった。彼女はフレンド宣教師の採用にパストラル形式への動きを感じていた。ホワイトは非礼を詫びながらも、「私は福音を説く人を雇うことに手を貸したくないのです」、そして「私の献金はそのような用途に使わないことを明確にしてください」と続ける。人は「関心」を感じたとき伝道に赴くのであり、伝道を職業とすることは許されない。そしてホワイトに言わせれば、そのような者によって伝えられる信仰は真のクエーカーリズムではありえなかった。³²⁾

このように年会、そして個人からの反対が大きかったにもかかわらず、伝道協会は日本への宣教師派遣を実施した。1886年1月22日に開催された伝道協会年次大会は、この困難な時期、会員たちは年会との対立をできるだけ避けるようにというスピーチで始まった。自分たちの信念に従って忠実に働いているかぎり、このような困難は過ぎ

去るだろうというのであった。³³⁾ その後、伝道協会は年会との表立った対立を避けながら活動を続けていくことになる。

おわりに

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は、南北戦争後の婦人外国伝道運動の影響を受けて結成された。その目的とするところは、キリスト教によって異教の女性を救うこと、彼女たちの地位向上をはかることであった。しかし目的達成のために宣教師派遣が必要となったとき、有給伝道者の存在を認めない年会と対立が生じた。伝道協会は宣教師派遣を強行し、中心事業が東京の普連土女学校の経営、維持であることを訴え、理解を求めていった。本来は組織的伝道活動とは無縁のはずのノン・パストラルのクエーカーたちを外国伝道協会結成に駆り立てた動機は、異教の女性の地位向上という半ば人道的目的だったといえよう。その後、フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は「婦人」の文字を外し男女を会員とするフィラデルフィア・フレンド外国伝道協会となり、さらに年会に吸収され、下部組織のミッション・ボードとなる。年会の公的組織に認められて以降も、フィラデルフィア年会内では外国伝道への反発は強かった。それゆえ外国伝道支持者たちは、新しい組織においても、伝道そのものではなく、より実践的な社会的活動——教育、災害援助、そして国際理解——を重視することによって、外国伝道への支援を確保、拡大しようとしたのだった。

註

- 1) Elbert Russell, *The History of Quakerism* (New York: Macmillan, 1941), p. 435.
- 2) *Ibid.*, pp. 435-438; D. Elton Trueblood, *The People Called Quakers* (Richmond: Friends United Press, 1971), pp. 251-253; John O. Greenwood, *Vines on the Mountains* (York: William Sessions Limited, 1977), pp. 210-211, 216-218.
- 3) パレスチナにおけるフレンド伝道について、1888年にアメリカのフレンドはラマラの活動の方を担うことになり、ブルマナの活動はイギリス側に委ねた。Russell, *ibid.*, pp. 436-440; Christina Jones, *American Friends in World Missions*

- (Elgin: Brethren Publication House, 1946), pp. 26-31.
- 4) Russell, *ibid.*, pp. 280-293; John M. Moore ed., *Friends in the Delaware Valley* (Haverford: Friends Historical Association, 1981), pp. 57-79. 後者の文献において、フロスト (J. William Frost) は、静寂主義時代のクエーカーリズムを活性化しようとした際、正統派リーダーは福音主義を、ヒックス派リーダーは合理主義を採ったと解釈する。福音主義を受け入れたフレンドの多くは、フレンドの中でも最も教養があり、コスモポリタンな人たちであった。フロストは、第2次信仰復興の影響といってもクエーカーの場合、メソジスト派やバプチスト派のキャンプ・ミーティングに代表される熱狂的な運動ではなく、ロンドンのクエーカーやコネチカットの会衆派と関係が深かったことを指摘している。(64, 66頁)
- 5) 19世紀アメリカにおけるクエーカーリズムの多様性については、Russell, *ibid.*, pp. 280-357, 482-509; Edwin B. Bronner ed., *American Quakers Today* (Philadelphia: Friends World Committee, American Section and Fellowship Council, 1972), pp. 5-31; Edwin B. Bronner, "The Other Branch" (London: Friends Historical Society, 1975); Rufus M. Jones, *The Later Periods of Quakerism* (Westport: Greenwood Press), pp. 435-540.
- 6) パストラル形式の導入過程について詳しくは、Francis B. Hall, *Quaker Worship in America* (Richmond: Friends United Press, n.d.), pp. 53-74.
- 7) Russell, *op.cit.*, p. 322. より詳しい数値については、Moore, *op.cit.*, p. 78.
- 8) Russell, *ibid.*, pp. 354-356, 484, 497-498; Philip S. Benjamin, *The Philadelphia Quakers in the Industrial Age, 1865-1920* (Philadelphia: Temple University Press, 1976), pp. 3-25.
- 9) Russell, *ibid.*, pp. 354, 497; Benjamin, *ibid.*, pp. 14-15.
- 10) Carol R. Berkin and Mary B. Norton ed., *Women of America* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1979), pp. 132-133.
- 11) Benjamin, *op.cit.*, p. 148.
- 12) Moore, *op.cit.*, pp. 177, 185, 187.
- 13) Moore, *ibid.*, pp. 189-191; Benjamin, *op.cit.*, pp. 150-151. 前者の文献において、ベーコン (Margaret H. Bacon) は、正統派フィラデルフィア年会における女性の権限 拡大は、女性たちの要求というよりも、平和運動の副産物だったと説明している。
- 14) Moore, *ibid.*, pp. 187-188.
- 15) 戸田徹子「アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立」『アメリカ史研究』10 (1987), pp. 40-41.
- 16) C. Jones, *op. cit.*, pp. 72-77.
- 17) 『年報』第2号では、憲法2条は次のように変更されている。"The object of this Association shall be to promote the knowledge of the Gospel in heathen lands, especially among women and children, and to assist in the Christian education of the people as ability and qualifications are given by the Lord." ここで文言を「異教地の女性と子供」から「異教地の人たち、特に女性と子供」に変えたことにより、「女性と子供」を中心に置きながらも伝道対象に幅をもたせたことが分かる。Annual Report of the Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia, 1 (1884), pp. 15-17; 2 (1885), pp. 17-18. 以下、the Women's Foreign Missionary Association of Friends of PhiladelphiaをWFMA-FPと省略する。
- 18) Rebecca N. Taylor, "Beginnings," *The Friend*, vol. 106, no.24 (12/15/1932), pp. 278-279. 『内村鑑三全集』23 (教文館、1971)、101-103頁。
- 19) WFMA-FP, printed letter of invitation to join the Association, Philadelphia, 1/16/1883; Annual Report of WFMA-FP, 1 (1884), p.3.
- 20) WFMA-FP, "Why Should Friends Engage in Foreign Mission Work?" Philadelphia, 3 mo., 1884.
- 21) *Ibid.*, pp. 1-2.
- 22) *Ibid.*, pp. 2-3.
- 23) Patricia R. Hill, *The World Their Household* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1985), p. 66.
- 24) WFMA-FP, "Why Should Friends Engage in Foreign Mission Work?" p. 3.
- 25) *Ibid.*
- 26) *Ibid.*
- 27) Annual Report of WFMA-FP, 1 (1884), pp. 14, 18-19.
- 28) Minutes of WFMA-FP, 8/14/1883, 10/9/1883, 11/28/1884, 1/23/1885, 6/20/1885; Annual Report of

- WFMA-FP, 1 (1884), pp. 10-11; 3 (1886), p. 12.
- 29) Minutes of the Meeting for Sufferings of Philadelphia Yearly Meeting, 9/18/1885 in "History of Japan Committee Archives," Box 9, Folder 2-A.
- 30) *Ibid.*
- 31) Taylor, *op. cit.*, p. 279.
- 32) Rebecca White, letter to N. C. Whittall, 7/23/1885.
- 33) Minutes of WFMA-FP, 1/22/1886.
- (1999年12月3日受理)